

Title	知識の文化的・言語的差異と民間意味論に関する実験 哲学的研究
Author(s)	水本, 正晴
Citation	科学研究費助成事業研究成果報告書: 1-5
Issue Date	2014-06-06
Type	Research Paper
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/12194
Rights	
Description	研究種目: 基盤研究(C), 研究期間: 2011~2013, 課題 番号: 23520003, 研究者番号: 70451458, 研究分野 : 分析哲学, 科研費の分科・細目: 哲学、哲学・倫理 学

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 6 日現在

機関番号：13302

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520003

研究課題名(和文) 知識の文化的・言語的差異と民間意味論に関する実験哲学的研究

研究課題名(英文) Experimental Philosophical Research of Cultural-Linguistic Variance of the Concept and Folk Semantics of Knowledge

研究代表者

水本 正晴 (Mizumoto, Masaharu)

北陸先端科学技術大学院大学・先端領域基礎教育院・准教授

研究者番号：70451458

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円、(間接経費) 1,170,000円

研究成果の概要(和文)：日本語の「知っている」と「分かっている」の意味を英語の"know"のそれと経験的・概念的アプローチによって比較し、日本語の二つの述語の間に認識論的に興味深い差異を発見することで、英語だけに基づく認識論への方法論的問題を提起することに成功した。また日本語以外の言語へも考察を広げる国際会議を開催し、発表者による様々な言語の知識述語の比較が行われ、それを通し、出席者の間で活発な議論を呼び起こした。

研究成果の概要(英文)：The uses of two Japanese counterparts of "know", "shitteiru" and "wakatteiru" were conceptually and empirically studied, and some epistemologically interesting differences were found between the two Japanese verbs, and therefore their relations with "know" are not straightforward. We also held an international conference to extend this observation to other languages, and provoked relevant debates.

研究分野：分析哲学

科研費の分科・細目：哲学、哲学・倫理学

キーワード：認識論 実験哲学 言語 日本語 意味 知識の理論 哲学の方法論

1. 研究開始当初の背景

実験哲学の成果は、知識概念や指示についての意味論的直観の文化的差異を明らかにしてきた。研究代表者は Mizumoto (2011) において発達のアプローチによって知識概念の実験的調査を行ってきたが、これはもっぱら日本語の「知っている」についての調査であった。

そこでは、英語の "know" と日本語の「知っている」の使用の比較が大学生を対象に行われ、両者に特に違いはないこと、また大学生が英語で質問に答える場合、答えに有意な差異が生じることなどが報告されていた。

また、Mizumoto (2011) においては、環境に実在する情報に対する単信念の調性 (Sustainability) として知識が分析されたが、これは自然な信念変化のパターンに基づく信念変化によって知識概念を解明するものであった。

2. 研究の目的

本研究においては、Mizumoto (2011) の成果をさらに発展させるべく、日本語における英語の "know" の対応物を「知っている」に限らず探究し、それらと英語との意味論的差異の探究を通し、知識概念についての言語的・文化的差異を実験哲学の手法で探究することを目指した。

またそれにより、そもそも知識の分析と呼ばれてきたものは何か、延いては認識論とは何かについて、新しい角度から光を当てるとともに、それを判断するための経験的データを提供しようとするものでもあった。

さらに、Mizumoto (2011) では知識概念以外の他の認識論的概念をも信念変化によって分析、説明するプログラムを Belief Change Fundamentalism と呼んだが、これを志向性および意味の説明へと拡張する Radical Belief Change Fundamentalism を実行に移すこともそこに含まれる。これがうまく行けば、我々は可能な "know" とその対応物の文化的差異とは何かを Mizumoto (2011) における普遍的な知識の分析を維持しながら説明できることになるはずである。

3. 研究の方法

理論面では Belief Change Fundamentalism を知識述語だけでなく意味論的語彙全般に適用することで、真理概念 (真理条件) でなく知識概念によって意味を捉えることを目指す。具体的には真理条件を与える T スキーマをこの観点から捉えなおし、次に指示関係をも同様の仕方で捉えることができることを示す。

またこの考えは、もともとウィトゲンシュタインのアスペクト概念、および取り囲み (Umgebung) 概念の分析より得られたものであり、ウィトゲンシュタインの規則遵守についての考察、あるいは彼の数学の哲学一般の考察 (特に彼のフレーゲ的プラトニズムとの

対決としての意味の使用説) と結びつけることで、より深いものとなるはずである。

経験的な調査を行う実験哲学面においては、"Know" に対応する日本語として「知っている」だけでなく「分かっている」をも研究の対象として、両者の使用の違いをも確かめることが重要となる。また、命題的知識だけでなく、"know how" に対応する日本語についても特定し、経験的データを取得することが近年の intellectualism を巡る論争に一石を投じることになるはずである。

さらに、英語と日本語の比較に留まらず、他の言語の比較へと研究を拡大させるため、研究協力者である信原幸弘教授 (東京大学)、Eric McCready 教授 (青山大学)、および海外研究協力者として Stephen Stich 教授 (Rutgers University) の協力のもと、国際会議を開き、世界から同様の目的のために研究者を集めて議論する。

4. 研究成果

まず、理論面において、2012 年度の科学基礎論学会において、Mizumoto (2011) の知識概念の意味の理論への応用、すなわち Radical Belief Change Fundamentalism を実行する第 1 弾として、「真理条件から知識条件へ」という発表を行った。これは真理条件意味論では捉えられない直説法条件文の「ならば」や連言「しかし」などの意味を、グライスの含みなどのプラグマティックな領域へと押しやることで説明するのではなく、自然な信念変化概念に基づき統一的に説明しようとするものである。

2013 年度の同学会においては、指示概念を同様の仕方で捉えるため、指示関係を、「自分が何をしているかの知識」としての) アンスコムの実践知を用い「自分がその語で何を意味しているかの知識」によって説明した。ここでの知識の分析は当然 Mizumoto (2011) のものであり、それによりクリプキ・パトナム流の外在主義的な意味の理論が自然な信念変化による指示関係によって説明できるということが示された。

この説明をより一般的に展開しより洗練させたのが 2013 年の Tokyo Forum of Analytic Philosophy で発表した Knowledge-First approach to meaning and Linguistic Normativity である。そこでは意味の規範性全般が自然な信念変化によって説明されたが、特に語の意味としての概念は、フレーゲの文脈主義の応用として、「疑問の内容をそれだけで孤立させて問うのではなく、それが埋め込まれた信念の文脈の中で問え」という概念の文脈主義によって、信念変化と結びつけられた。そして当然、その内容は、アンスコム流の実践知によって説明されることになる。例えば、「水」という語の意味として、探究の結果水が H₂O から成ると知ったとして、ある人は「水」は H₂O を意味していたと考えるが、別の人は「それはもは

や水ではない」とそれまでの信念を撤回し、「水」で自分が意味していたものは存在しなかった、と考えるかもしれない。その場合、たとえ表面的に使用が一致していても、二人は「水」で別のものを意味していたのである。他方信念を撤回しなかった方は、「水」で自分が何を意味していたのかを「知っていた」ということになる。これはもちろん Sustainability という知識の分析の帰結である（この分析の強みは、通常の経験的な知識だけでなく、未来についての知識やアンスコムの実践知をも統一的に説明できる点にあった）。

2014年1月のWittgenstein Meetingでの発表 Truth, Aspect, and What is said-From Wittgenstein's thesis of meaning as use においては、この理論をウィットゲンシュタインのアスペクト概念および取り囲み (Umgebung) 概念によって説明することで、フレーゲの思想 (Gedanke) 概念によって伝統的に捉えられてきた命題を、知覚内容により近いものから捉えなおすことを可能にするとともに、これまでの意味の説明をウィットゲンシュタインの意味の使用説の観点と繋げることで、Travisらの文脈主義の一種として説明した。これにより、この捉え方による発話の内容としての意味と真理条件との関係がより明確となり、結果として意味や語用論的内容を真理条件によって説明すること（例えば文脈主義者の Recanati の試み）の限界を浮き彫りにすることができた。

また、2012年出版の書籍『ウィットゲンシュタイン vs. チューリング』においては、ウィットゲンシュタインの数学の哲学の意義をチューリングとの対決から浮き彫りにしながら、彼の意味の使用説がフレーゲの意味 (Sinn) のプラトニズムとの対決から自然に導き出されてきたことを振り返ることで、計算可能性概念およびチューリングのテーゼが数学記号の意味の考察と切り離せないことを示した。だが規則遵守の考察は、使用された文の意味が単なる部分の意味の合成以上のものである、ということをも含意する。そこで最終章では、規則遵守のパラドクスへの解答をも与えるものとしてウィットゲンシュタインのアスペクト概念、および取り囲み (Umgebung) 概念を分析し、それを志向性一般の説明へと拡張した。

実験哲学面では、2012年の科学基礎論学会の秋の例会において、"The Very Idea of Experiment: External Critiques of Experiment Philosophy" というワークショップをスティッチ教授を招いて開催し、心理学、言語学、およびウィットゲンシュタインの立場から、実験哲学について批判的に考察しながら討論を行った。このワークショップについては、出版が遅れているが、科学基礎論学会の英文誌に特集として出版される予定である。

また翌日、シンポジウム "Know in

Japanese" をスティッチ教授、信原教授、マクレディ教授に加え、海外からの若手研究者2名と飯田隆教授を招いて開催し、日本語の「知っている」の振る舞いについて論じた。

これをもとに次に2013年8月に国際会議 Epistemology for the Rest of the World を開催し、研究代表者も複数の発表を行った。

まずスティッチ教授とともに会議冒頭で Manifesto を発表し、認識論が潜在的な言語的差異を無視できないということを強調した。"know" の語彙的意味が他のすべての言語の対応する語と共有されているかどうかは経験的な問題であり、検証されているわけではない。そのような現在の認識論における前提を我々は universality thesis と呼び、それが偽でありそうなこと、偽であった場合の選択肢を3つ提示した。

また、神戸大学の定延教授と共同で、"Know" in Japanese と題した発表を行い、そこで "know" と日本語の「知っている」および「分かっている」は状況によって使用がそれぞれ異なる場合があると論じ、情報のテリトリー理論と経験的データによって「知っている」が情報概念と密接に結びついている一方で「分かっている」はそうではなく、stakes effect もほとんど見られないなどと指摘した。それに基づき、研究代表者は、どちらが "know" に近いのか、と問うのではなく、むしろ英語の "know" が曖昧なのではないか、と問いかけることで、英語だけに基づく認識論への方法論的問題を提起することに成功した。

さらには和泉悠 (メリーランド大学)・次田瞬 (東京大学) との共同発表である "know how" についての論文において、日本語の know how に対応する表現、「やり方を知っている」「どうやるか知っている」などの使用がほとんど日常の会話の中には現れない、ということ Google のデータなどで指摘し、Stanley などの主張する主知主義が "know how" を能力様相としているのに対し、日本語のそれは主に義務様相として使われているのではないかと論じた。

会議では、発表者による韓国語、中国語、サンスクリット語、アラビア語などの比較も行われ、活発な議論を呼び起こした。

この会議の成果は書籍として出版する予定であり、現在水本、スティッチ、マクレディに Jason Stanley 教授も編集者に加え、オックスフォード大学出版からの出版を目指して準備が進んでいる。

その後、2013年9月のイギリスの実験哲学会議でも和泉・次田との共同発表として know how に関連する発表を行った。ウィリアムソンの2つのテーゼから帰結する、「knowledge how は心的状態である」というテーゼについて、日本語の対応する表現の分析とロボット工学の passive walk などの例から批判する、というものであった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計13件)

発表者名: Masaharu Mizumoto
発表標題: Truth, Aspect, and What is said
学会等名: Wittgenstein Meeting: ウィトゲンシュタインの論理、意味、心の哲学
発表年月日: 2014年01月18日~2014年01月19日
発表場所: 慶応大学三田キャンパス

発表者名: Shun Tsugita, Yu Izumi, Masaharu Mizumoto
発表標題: Is knowing how a mental state?
学会等名: Experimental Philosophy Group UK Workshop
発表年月日: 2013年09月12日~2013年09月13日
発表場所: Bristol University (UK)

発表者名: Yu Izumi, Shun Tsugita, Masaharu Mizumoto
発表標題: "Knowing how" in Japanese
学会等名: Epistemology for the Rest of the World
発表年月日: 2013年08月08日~2013年08月09日
発表場所: 北陸先端科学技術大学院大学東京サテライト

発表者名: Masaharu Mizumoto and Toshiyuki Sadanobu
発表標題: "Know" and Japanese Counterparts: "Shitte-iru" and "Wakatte-iru"
学会等名: Epistemology for the Rest of the World
発表年月日: 2013年08月08日~2013年08月09日
発表場所: 北陸先端科学技術大学院大学東京サテライト

発表者名: Masaharu Mizumoto and Stephen Stich
発表標題: Manifesto
学会等名: Epistemology for the Rest of the World
発表年月日: 2013年08月08日~2013年08月09日
発表場所: 北陸先端科学技術大学院大学東京サテライト

発表者名: Masaharu Mizumoto
発表標題: Knowledge-First approach to meaning and Linguistic Normativity
学会等名: Tokyo Forum of Analytic Philosophy
発表年月日: 2013年06月27日
発表場所: 東京大学(本郷)

発表者名: 水本正晴
発表標題: 指示の理論と信念変化
学会等名: 科学基礎論学会
発表年月日: 2013年06月15日~2013年06月16日
発表場所: 大阪大学(吹田)

発表者名: 水本正晴
発表標題: 言語と生活形式~哲学的観点から
学会等名: 日本認知科学会 ワークショップ「進代言語学の方法論的基盤」
発表年月日: 2012年12月15日
発表場所: 仙台国際センター

発表者名: Masaharu Mizumoto
発表標題: The Epistemology of "Shitteiru" and "Wakatteiru"?
学会等名: "Know in Japanese" Symposium
発表年月日: 2012年11月04日
発表場所: 東京大学(駒場)

発表者名: Eric McCready
発表標題: Evidentials, Epistemology and Knowledge
学会等名: "Know in Japanese" Symposium
発表年月日: 2012年11月04日
発表場所: 東京大学(駒場)

発表者名: Masaharu Mizumoto
発表標題: Mathematical, Psychological, and Philosophical (?) Experiments for Wittgenstein
学会等名: 科学基礎論学会秋の例会
発表年月日: 2012年11月03日
発表場所: 東京大学(駒場)

発表者名: 水本正晴
発表標題: 真理条件から知識条件へ
学会等名: 科学基礎論学会
発表年月日: 2012年06月06日
発表場所: 首都大学東京

発表者名: Masaharu Mizumoto
発表標題: "Wittgenstein and Turing vs.

Cantor ”

学会等名：Church ' s Thesis: Logic, Mind
and Nature

発表年月日：2011年6月3日

発表場所：クラクフ（ポーランド）

〔図書〕(計1件)

著者：水本正晴

出版社：勁草書房

書名：「ワイトゲンシュタイン vs. チューリ
ング～計算・A I ・ロボットの哲学」

発行年：2012年

総ページ数：467ページ

6. 研究組織

(1) 研究代表者

水本正晴(MIZUMOTO MASAHARU)

北陸先端科学技術大学院大学

先端領域基礎教育院・准教授

研究者番号：70451458

(2) 連携研究者

信原幸弘(NOBUHARA YUKIHIRO)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：10180770

エリック・マクレディ Jr. (ERIC MCCREADY
Jr.)

青山学院大学・文学部・准教授

研究者番号：30433692